



サハラ以南アフリカの国家と政治のなかのイスラーム

——歴史と現在——

佐藤 章 編

千葉 アジア経済研究所 2021 年 v+171 p.

イスラームはキリスト教と並ぶ世界宗教であり、サハラ以南アフリカにも信徒が多く存在する。その数は 21 世紀初頭に 2 億 4000 万人にのぼり、世界のムスリム人口に占める比率は 15%に達するという。地域的にみれば、ムスリム人口比率の高い国々は西アフリカと東アフリカに存在し、人口の大半がムスリムである国も少なくない。中部アフリカと南部アフリカでは全体的にムスリム人口は少ないものの小規模ながらムスリムのコミュニティはたしかに存在する。サハラ以南アフリカのムスリムが国家と政治にどのような関わりを持ってきたかについて事例研究をとおして検討したのが本書である。

この 20 年ほどのサハラ以南アフリカでは、アル＝カーイダやイスラーム国に忠誠を誓うイスラーム主義武装勢力——ボコ・ハラムやアッシャバーブなど——の活動がみられ、政治研究の重要な課題としても浮上している。ただ、このようなカレントな情勢を離れたところでは、政治研究者はサハラ以南アフリカのムスリムの歴史について必ずしも十分に研究してきていないのではないか——これが本書のベースにある問題意識である。本書副題の「歴史と現在」はこの問題意識を込めたものである。カレントな情勢のみに偏らず歴史を十分に理解し、歴史の理解を踏まえてカレントな情勢をより深く理解することを本書はめざしている。

本書はアジア経済研究所が新たに開始した無料の電子書籍のシリーズの一巻として刊行された。おもにアフリカ地域研究を意識した学術書であるが、世界の歴史やイスラームに関心をお持ちの方に一般書として読んでいただけるよう、読みやすさを重視した編集がなされている。今日ボコ・ハラムの活動に揺れる北部ナイジェリアのムスリム・エリートたちが独立前夜に何を考えていたか（第 1 章）。ザンジバルのスルタンの統治を離れ、新たにケニア国民となったムスリムたちの法的権利を守る取り組みがどのようになされたか（第 2 章）。ソマリアで続くアッシャバーブの活動はこの国における政治的イスラームのどのような歴史の産物として考えられるものなのか（第 3 章）。フランス領西アフリカの独立運動にムスリムがどのように関与したのか（第 4 章）。インドから南アフリカへの移住者に起源を持つムスリム・コミュニティがアパルトヘイト時代をどのように乗り越え、今日まで維持されてきたのか（第 5 章）。本書各章をとおして、サハラ以南アフリカに生きたムスリムの姿に思いをはせていただければ編者としては喜びである。

佐藤 章（さとう・あきら／アジア経済研究所）

